

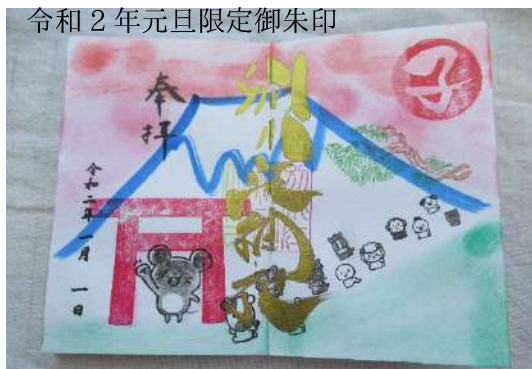
旅してみよう「おもろい」神社仏閣 その5

愛知県の「おもろい！（大阪弁）」神社仏閣、第5回目。今回は、またもや北区！「別小江神社」です。

カラフル御朱印「別小江神社」

別小江神社は、『延喜式神名帳ⁱⁱ』に記された式内社。近年の御朱印ブームに乗っかって（なのかどうかは分かりませんが）、

令和2年元旦限定御朱印



この神社もカラフル

な御朱印で有名です。毎月、色鮮やかな《限定御朱印》を頒布しており、参詣者が絶え間なく訪れる人気の神社です。

別小江神社（節分時）



別小江神社の縁起

『北区の歴史ⁱⁱⁱ』によると、「創建年代は不明。もと、千本杉にあったのを天正十二年（1584）に織田信雄（信長の子）が、現在の地に移したと伝える。」とのこと。しかし、延喜式神名帳に載っている「別小江神社」と、現在ある神社は、全く同じものではないようです^{iv}。江戸

時代の地誌『尾張志^v』では、「延喜神名式に見えて今在所詳ならず」とあり、江戸時代に一度その所在がわからなくなっています。代わりに「六所明神」があり、明治時代初めの神仏分離令で全国の神社について詳細な調査が入ったときに、この神社は「別小江神社」だろう^{vi}とされたようです。

祭神は、伊弉諾尊、伊弉冉尊、天照大御神、素盞鳴尊、月読尊、蛭児命とオールスター揃い踏み。神社自体が、一度所在がわからなくなっているため、創建当ても祭神が同じだったかは分かりません。名古屋の北の方では、そこかしこに「六所社」があり、そちらの祭神も同じくこの六柱であるようなので、このあたりであるとき流行した神さまたちだったのかもしれない。

神功皇后伝説が別小江神社に？

境内には「神功皇后^{vii}」の意匠や立て看板などがあります。その「別小江神社物語」によると、神功皇后のお産を手伝った尾張国造稲植^{viii}が、《産み月間近で新羅征伐に出かけた皇后が出産を遅らせるために腹に巻いた石》の一つと《胞衣》とを載せて帰り、この境内に祀り延奈八幡とした^{ix}、それが現在の別小江神社です。とのこと。

別小江神社境内末社の八幡社は、大正9年に境内神社として合祀されています^x。なので、別小江神社=八幡社でもある……ということで、そのまま「別小江伝説」としたのかもしれない。また、この地は、「安井の里」といい、昔から「安井の稲藁をひいてお産をすると、安産間違いなし」という話だったといえます。八幡社^{xi}でも、有名な神社だったのでしょね。

昔から今にいたる間に……

一度、その名が歴史の中に消え去ってしまっても、人々の中で再び復活し、たくさんの方が訪れ、崇敬を受けるようになるというのは、すごいことだと思います。今、パワーや、勢いのある神社。そんな感じがしました。ぜひ訪れてみてくださいね。

(にわか名古屋人・M)



手水場後方にある
神功皇后の絵図

i 別小江神社 名古屋市北区安井 4-14-14 境内社に八幡社・神明社・御嶽社・金刀比羅社・津島社とのこと。



別小江神社物語看板



ひな祭り限定御朱印



境内に残る石碑

ii 『延喜式』(延長5年(927年)成立)巻九・十の、「官社」に指定されていた全国の神社一覧のことです。

(→国立国会図書館デジタルコレクション 別小江神社は66コマ)

iii 『北区の歴史(名古屋区史シリーズ8)』長谷川国一 著(愛知県郷土資料刊行会 1985.11)。織田信雄は、信長の第二子です。天正十二年という、本能寺の変(天正十年)よりも後、小牧・長久手の戦いのあった年です。信雄・徳川家康軍と秀吉軍が各所で合戦しているので、その前後のどちらかの間に移築させたのでしょうか。

iv 戦中に焼失し、昭和41年に再興したとのことなので、現在の社殿は比較的新しいです。

v 『尾張志. 6 春日郡』深田正韶 等編[他](博文社 明31.3)(→国立国会図書館デジタルコレクション 56コマ)

vi 『特選神名牒』教部省 編(磯部甲陽堂 大正14)(→国立国会図書館デジタルコレクション 166コマ)に、「浅野長政の父勝行が此村にて大江八幡を祭りしとき社司稲垣某に與へし免状の文に別小江神社其方は社人の事候間五百文餘令修造候云云天正十二年二月十五日勝行花押稲垣十郎太殿とありこれまた證とするに足れり姑く附て考に備ふ」とあります。勝行とありますが、浅野長政の父は「浅野長勝」。長勝はまた、豊臣秀吉の妻ねね(おね)の養父でもあります。ねねが秀吉に嫁いだ関係で、浅野長政のちに秀吉の五奉行となります。稲垣十郎太にあてて、「別小江神社はあなたが社人(神職)だから500文で修造してね」といったような免状を送ったから、ここが別小江神社なんじゃない?ということでしょうか。(別小江は大江神社からわけられたので別小江という、という説も)

vii 神功皇后とは、第14代仲哀天皇の皇后であり、第15代応神天皇の母、息気長足姫命おきながたらしひめのみことのこと。今日では、実在しない伝説上の人物であるとの見方がほとんどです。が、戦前までは「存在は史実」として学校で教えられていました。記紀では、仲哀天皇が熊襲征伐中に崩御(仲哀天皇9年2月)した時に遺志を継ぎ、熊襲征伐を達成(3月)。また、海を越えて新羅へ攻め込み百済、高麗をも服属させた(10月、三韓征伐)といひます。また、その際に磐田別命ほんだわけのみこと(応神天皇)の出産間近であったけれども、石を当ててさらしを巻き、冷やすことによって出産を遅らせ、そして、凱旋のちに出産した(12月)という話です。桃太郎誕生地がたくさんあるように、いろいろなところに「神功皇后」伝説もある、くらいでいいのかもしれない。

viii 尾張国造建稲種たけいさな(ヤマトタケル妃、美夜受比売の兄)でしょうか? ただし稲種は、ヤマトタケル東征の際に副将軍として軍を従えたけれども、駿河湾にて水難事故で死んだという話もあります。仲哀天皇は、ヤマトタケルの子(母は別妃)なので、尾張との関わりを強調するためにそういう設定となったのでしょうか。(仲哀天皇も、享年から逆計算すると、ヤマトタケルの死後36年くらいに生まれたことになるため、伝承上の人物と言われています)

ix 『西春日井郡誌』愛知県西春日井郡 編(愛知県西春日井郡,大正12)に「八幡社の由来」として、同様の説明があります。(→国立国会図書館デジタルコレクション 203コマ以降) 胞衣を千本杉に奉納した「胞衣八幡」なる神社があり、天智天皇の白雉8年に官幣を祭り、延奈八幡といったとのこと。その時の祭神は、神功皇后ほんだわけのみことと磐田別命。

x 前項目と同じく『西春日井郡誌』より。洪水で延奈八幡が流された後、浅野長勝が津島に移った時に一緒にもっていき、天正十一年に安井に帰ってきた時に社寺を造営し、津島から戻したそうです。ですが、そのあと(天正十二年)にさらに織田信雄が千本杉から移築している?……どちらの伝承が正しいのでしょうか。それとも、信雄が移築したのは、延奈八幡以外の別小江神社本殿だったのでしょうか。……謎が残ります。

xi 全国の八幡社・八幡神社で祭られる「八幡神」は、平安時代ごろまでに磐田別命ほんだわけのみこと(応神天皇)と同一視されました。また、母である息気長足姫命おきながたらしひめのみことを共に祀る神社も多くあり、武運の神・安産祈願の神とされます。